



「共同生活の家 花籠」では元気な入居者は農作業を手伝う(岐阜県八百津町)

入居者の一人で、4月に亡くなった小山田きぬ子さん(享年82)。咲枝さんによると、亡くなるまで咲枝さん夫妻、72歳の入居者の計4人で元気に暮らした。独居のきぬ子さんが花籠に移り住んだのは09年6月。「介護が少し必要だったが、自立した生活を送りたいと願っていた」と咲枝さんは振り返る。

作家・池井戸潤氏の故郷、岐阜県八百津町に、古民家を利用したシェアハウス「共同生活の家 花籠」がある。家主の波多腰和雄さん(71)、咲枝さん(67)夫婦が2008年10月、60歳以上の女性で自立した生活が可能な人を対象に開設した。これまでに延べ26人が住んだ。

シニアが、他人と共同生活を送るシェアハウスを新たな住まいとして活用している。一人暮らしが不安だから、子どもに迷惑をかけたくないから、など理由は様々。人生の終盤を他人と共に暮らすことで、にぎやかで楽しいものになりたいと願うシニアが増えているようだ。

# シェアハウス生活 高齢者に広がる

## 同世代で支え合おう

シニアが対象の主なシェアハウス		
名称	1カ月の家賃	特徴
シェアハウス富丘 (北海道千歳市)	平均 5万3000円	単身女性専用で、シニアも入居可能な多世代共生型。定員6人
グループハウス榎 (神奈川県伊勢原市)	14万5000円 (食事含む)	定員6人で65歳以上。料理の盛り付けなど、できる範囲で入居者が共同生活を支える
ナゴヤ家ホーム (名古屋市)	平均 3万3000円	名古屋市営住宅の一部を利用。同市在住の60歳以上向け。見守りサービスもある
共同生活の家 花籠 (岐阜県八百津町)	8万5000円 (食事含む)	古民家を改装。個室を設けず、家族のように過ごす。60歳以上の女性限定
ママズ&パパス (京都府城陽市)	平均 3万7000円	年齢、性別問わず定員6人。1階の食堂兼カフェを地域に開放

(注) 敷金、礼金、仲介料が発生する場合がありますので事前に確認を

シニアが共同生活で心がけたい3カ条

- 1 自分の過去の経歴を、周りから聞かれない限り話さない。自慢話ととられ敬遠される
- 2 ゴミ出しなどでルールを守らない人がいても、直接注意しない。家主や管理会社を通じてルールを守らせる
- 3 入居者同士の食事会やパーティーがあれば、年長者として参加費を若い世代より多めに出す

(注) 日本シェアハウス協会代表理事、山本久雄さんの話を基に作成

するのが入居の条件だ。看護師の資格を持つ咲枝さんは、入居者を家族として扱い、必要最小限しかケアしない。家には段差もある。高齢者には不便だが、そんな生活を送るうちに、曲がった腰が真っすべになったり、箸を使えるようになったりした入居者が現れたという。

2000年に介護保険が導入され、シニアの住まいは大きく2つに分かれた。元気なうちは自宅、寝たきりになったり認知症を発症したりしたら、特別養

護老人ホームをはじめとする介護施設で暮らすスタイルだ。だが健康を維持しても、核家族化や少子化で、パートナーに先立たれると一人暮らしになるケースが増えた。生涯独身というシニアも多くなり、孤独死が社会問題になってきた。老後のことで子どもや周囲に迷惑をかけたくないと考えるシニアが、新しい住まいとして注目しているのがシェアハウスといえる。

日本シェアハウス協会(東京・杉並)によると高齢者も対象にしたシェアハウスは増加基調にある。三菱日立ホームエレベーター(岐阜県美濃市)が8月、全国の60〜75歳600人に実施した住環境調査によると、42%がシェアハウスに「興味がある」と答えた。同社は、今どきのシニアは同世代で支え合っ

て暮らす意識が高いとみる。

シェアハウスはキッチンや水回りが共用。このため家主が改装にかかる費用も比較的抑えられるため、入居者の家賃は一般

の賃貸住宅より低いケースが多いのもシニアに魅力のようだ。自宅の管理を子どもに任せ、子どもがシェアハウスの家賃を払う形で移り住む人もいる。

ただ、高齢者にとってシェアハウスでの暮らしはまだなじみが薄い。このため、知名度を高めようと活動し始めたのが、京都府城陽市にある「ママズ&パパス」だ。

同ハウスの入居者は9月に入居した66歳のAさんだけ。「妻と離婚し、子どもとももう何年も会っていない。同世代とにぎやかに暮らしたかった」というAさんだが、入居者が自分一人では寂しいと感じていた。

## 畑仕事や掃除も「自立」が条件

同世代だけでなく、他世代とも家をシェアすれば、シニアがさらなる刺激や活力を得られるのではないかと。そんな多世代共生が売りのシェアハウスも誕生し始めている。

東京都武蔵野市に14年1月オープンした「リベスタハウス吉祥寺」。全28部屋で入居は25歳以上が条件だ。仲介不動産会社によると、現在満室でシニアの入居はないが、問い合わせが定期的にあるという。多世代共生をうたったシェアハウスは8月、北海道千歳市にも女性限定で誕生した。

日本シェアハウス協会の代表理事・山本久雄さんは、シニアがシェアハウスを選ぶ際に「介護が必要になっても住み続けられるか、体験入居ができるかなどハウスの方針を確認してほしい」と指摘する。入居後の注意点として、山本さんは助言すること。そして、特に若者と共に入居する場合は、過去の自慢話をしないこと。他者と暮らす「共生マナー」を意識することが、高齢者のシェアハウスでの暮らしには不可欠のようだ。

(保田井建)

目をつけたのが、ハウスの1階にある食堂兼カフェ。地域の高齢者が昼食に立ち寄る場所だった。「まずはここを交流の場にしては」と家主の西尾泰憲さん(64)に相談。今月1日、ここを活動場所とする有料サークル「夢中倶楽部(くらぶ)」を発足させた。地域のお年寄りに楽しい場所と思ってもらい「シェアハウスの情報を発信して今後の住まいの選択肢の一つにしてもらえれば」(西尾さん)と考えている。

同世代だけでなく、他世代とも家をシェアすれば、シニアがさらなる刺激や活力を得られるのではないかと。そんな多世代共生が売りのシェアハウスも誕生し始めている。